2017年度
非文字資料研究センター
第3回公開研究会

「上海租界と外国人社会について」

主　　催：神奈川大学非文字資料研究センター
共　　催：上海社会科学院歴史研究所、『良友』画報研究会
日　　時：2017年10月28日（土）14：00～18：00
場　　所：神奈川大学横浜キャンパス3号館406号室
プログラム
開会挨拶：内田青蔵（非文字資料研究センター長）
司　　会：孫安石（非文字資料研究センター研究員）
報　　告：1.「上海のユダヤ人研究の最新動向について」　王健（上海社会科学院歴史研究所）
2.「日本軍政下の上海におけるユダヤ絶滅政策の存否をめぐって」　菅野賢治（東京理科大学）
3.「上海のフランス語新聞*Le Journal de Shanghai*における日・仏・中文化交流」　趙怡（東京工業大学）
4.「ドイツの版画と上海の魯迅」　東家友子（東京大学大学院博士後期課程）
コメンテーター：大橋毅彦（関西学院大学）、石川照子（大妻女子大学）、熊谷謙介（神奈川大学）、菊池敏夫（神奈川大学）

公開研究会開催の報告

孫安石（非文字資料研究センター研究員）

2017年度非文字資料研究センターの第3回公開研究会「上海租界と外国人社会について」が10月28日、開催された。

今回の公開研究会を開催した目的は二つあり、一つはシンポジウムのテーマに掲げた上海の外国人社会に関連する最新の研究動向を日本と上海の研究者が紹介し、研究情報の共有を進めることと、もう一つは中国側の都市研究をリードする上海社会科学院歴史研究所と非文字資料研究センターが今後、より密接な学術交流を図るために交流協定を締結するという実務交渉を進めることであった。以下、シンポジウムのテーマに関連する報告内容については、各報告者がその内容について触れているので、ここでは簡単に幾つかの感想を記すことにしたい。

上海社会科学院歴史研究所と非文字資料研究センターの学術交流提携調印式。左から内田青蔵氏と王健氏

上海のユダヤ難民に関する研究については、報告者の一人である王健氏による先行研究『上海猶太人社会生活史』（上海辞書出版社、2008年）、『上海的猶太文化地図』（上海錦綉文章出版社、2010年）などが出版されており、今まで、1945年以前の上海ユダヤ難民の状況についてはその概略が究明され、その研究成果は「上海猶太難民紀念館」の展示にも反映されている。しかし、1945～1949年の間のいわゆる国共内戦時期の動向についてはまだ、不明なところが多い。ところが、今回の王氏の報告により国共内戦期を経験したユダヤ難民の高齢化による資料の寄贈なども活発化し、新たな資料の発掘が進んでいる状況が紹介された。菅野氏が行った日中戦争時期の上海のユダヤ難民に対する日本側の政策を論じた報告は、従来はその事実解明が難しく、多くの上海研究者からもタブー視された課題の解明に臨んだもので、氏は、上海ユダヤ居留民の処遇政策の陣頭指揮を

シンポジウムの会場の写真

執った實吉敏郎海軍大佐の業務日誌を解読し、一部の人々の間ではよく知られていた噂の真相に迫ることができることについて紹介するものであった。次の趙怡氏の報告は、上海で発行されたフランス語新聞 *Le Journal de Shanghai* を取り上げ、フランス語新聞に現れる日本と中国、そして、フランスとの文化交流の一端を紹介するものであった。近年、上海のフランス租界に関する研究は最も注目される分野の一つで、すでに『上海法租界史研究』（第一輯　2016 年、第二輯　2017 年、ともに上海社会科学院出版社）という専門誌が刊行され、今後、大きな成果が期待される。東家氏の報告は、1920 年代の魯迅の木版画運動との関わりを、当時のドイツ版画や芸術書の収集、普及活動に関わった人物を手がかりに究明することを目指すもので、上海のドイツ人コミュニティーの重要性について紹介するものであった。

上海の外国人コミュニティーについて全面的な再検討が始まったのは、2010 年から刊行が始まった「上海的外国文化地図シリーズ」（上海錦綉文章出版社、2010 年）で、同叢書は、上海のイギリス人、フランス人、ドイツ人、アメリカ人、ロシア人、日本人、韓国人コミュニティーの形成、発展、消滅について、その概略を述べており、関連研究の嚆矢となるように思われる。今後、上海に限らず、北京、天津、青島、広州などの地域においてもより活発な研究成果が発表され、中国近現代史の重要な一要素として刻印された外国人コミュニティーの研究が一層、活発になることを期待したい。

上海ユダヤ難民研究の新たな動向

王健（上海社会科学院歴史研究所）

王健氏の報告は、上海ユダヤ難民に関連する最新の研究動向を『以色列信使報』と虹口区の新資料を駆使し、上海へ逃れたユダヤ難民の人数、上海までの旅程、上海での日常生活の三つの部門に分けて紹介するものであった。氏の紹介によれば、1939 年 8 月以前の上海のユダヤ人は約 1,000 人前後の人数で、ナチス政権による政治的弾圧を逃れた難民というよりも外国人の居留民の一部としての性格がむしろ強かった。ところが、1938 年 8 月からユダヤ難民は急激に増加し、1939 年 8 月には約 11,000 人に達することになる。このようなユダヤ難民を制限するために上海では欧州からのユダヤ難民を制限する措置が実施されたが、1940 年代に入ってもシベリアや中国東北、日本、朝鮮半島を経由し、上海に到着したユダヤ難民の総数は 23,000 人前後の数を数えるようになった。

ユダヤ難民の上海到着までの脱出ルートは、欧州からスエズ運河を経て、インド、シンガポール、香港を経由し、上海に至る航路をたどった人と、欧州からソ連・シベリアを横断し、哈爾賓を経由し、上海に至る大陸横断ルートが使われたことが、旅券や船舶、警察関連の記録などから確認される（図 1）。

1945 年の終戦後の上海でのユダヤ難民の生活については近年、個別の事例が幾分か集まっている。

例えば、1946 年 1 月 28 日、「上海無国籍避難民処理事務所」から「無国籍避難民通行許可証」を取得した Nachemstein Herbert 氏は、上海で「East Transportation」のオーナーの身分を保持していたことが分かる（図 2）。

図 1　欧州から上海に至るユダヤ難民の脱出ルート

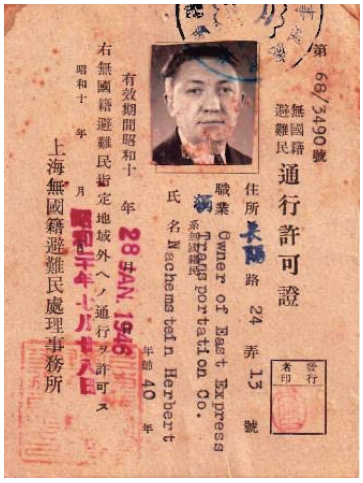

図 2　Nachemstein Herbert 氏の「無国籍避難民通行許可証」

ユダヤ難民の中には中国の医師試験に合格した人もいた。例えば、図 3 は、ユダヤ人の 39 歳の女性、G. Varo 氏が、中華民国の医師試験に応募し、「専門職業及技術人員考試法第 12 条」の規定により、面接試験を免除され、医

図３　G. Varo 氏の医師試験合格証明書

師試験に合格したことを証明する記録で、1948 年 1 月に「考試院委員長」によって発行されている。

今後、1945 年の終戦から 1949 年の新中国の建設までの、国共内戦時期の上海におけるユダヤ難民の生活についてより多くの資料が発掘されていけば、より具体的な描写が可能になるものと期待したい。

日本軍政下の上海におけるユダヤ絶滅計画の存否をめぐって

菅野賢治（東京理科大学）

日本軍政下（1937-45）の上海に滞在・滞留した推定２万数千人規模のユダヤ教徒・ユダヤ人集団については、旧来、マーヴィン・トケイヤー、メアリー・シュオーツの共著『河豚計画』（1979 年）を典拠とし、ナチス・ドイツからの示唆を受けた日本当局によるユダヤ絶滅計画の存在が取り沙汰されてきた。いわく、1942 年の夏、東京のドイツ大使館付警察武官ヨーゼフ・マイジンガーが上海に乗り込み、現地のユダヤ住民を絶滅に追いやる方策を提示し、日本軍政当局もそれを受け入れる寸前まで行きかけたところで、日本領事館員（一部の記述では副領事）柴田貢（1910-77）が情報をリークし、みずからの外交官生命を賭してまで、その計画を頓挫させたというのだ。

本研究の発表者は、この逸話の史実性を突き詰めるべく、故・柴田貢の妻・道子氏にも取材を行うなどしながら既存資料の水準で考証を行った結果、確かにその種の絶滅計画に関する流言が当時の上海に存在していたものの、それが『河豚計画』に書かれているような仕方で実行寸前の段階にあったとは、いかに見ても考えにくい、という結論に達していた。そのような折（2017 年 10 月）、1942 年 4 月、上海海軍武官府特別調査部長として犬塚惟重のあとを引き継ぎ、翌 43 年 6 月まで、上海ユダヤ居留民の処遇政策の陣頭指揮を執った實吉敏郎海軍大佐（1886-1973、図 4）のご子孫のもとに、大佐の手による当時の克明な業務日誌が保存されていることが判明し、この一次資料の読解を通じて、上の結論が完全に裏づけられることとなった。この業務日誌には、「マイジンガー＝柴田事件」が起こったとされる当日、上海ユダヤ組織の代表者らが海軍武官府に出向き、不穏な噂を根拠として抗議を申し入れた末、實吉大佐の部下、久保田勤から、「そのようなデマに惑わされてはならない」と説諭された経緯が記されているのだ。この日誌にはまた、43 年 2 月、虹口の「無国籍避難民指定居住区」開設ならびに「無国籍避難民処理事務所」設置に至る過程も事細かに記されており、これまで国内外において、もっぱら元・難民の証言をもとになされてきた歴史研究に、日本当局の側からの視点を補って余りあるものである。

図４　實吉敏郎海軍大佐

この實吉日誌を、英語訳付きで公表する作業が急がれる。

それにより、日本軍政下の上海には、ユダヤ絶滅計画が「現実性」としてこそ存在しなかったものの、「潜在性」として、常にユダヤ居留民たちの脳裏に漂っていた様を如実にとらえることができるようになるからである。

上海のフランス語新聞 *Le Journal de Shanghai* における日・仏・中文化交流

趙怡（東京工業大学）

上海租界研究が近年大きく発展している一方、フランス語資料を使うフランス租界への研究が僅少である。租界の外国語新聞といえば、従来筆頭にあげられたのは *North China Herald*（『北華捷報』）や *North China Daily News*（『字林西報』）であり、『大陸新報』などの日本語新聞も近年注目を集めつつある。対して *Le Journal de*

Shanghai（1927-1945、中文名『法文上海日報』）は、長年埋もれており、内外の上海史研究家の間でもあまり知られていない。

しかし発行時期が 17 年あまりに及ぶこの日報は、フランス租界が最も発展を遂げた時期をほぼカバーしており、その状況をリアルタイムに報告する貴重な資料源だった。また報道対象は、2,500 人前後にすぎなかったフランス居留民という小さなコミュニティーに留まらず、祖国を含む欧米諸国はもとより、フランスの植民地だったアフリカ諸国とインドシナ、そして中国を初めとするアジア各国も含まれている。さらに主な英字新聞がほぼ停刊に追い込まれた太平洋戦争期間中も発行を続けており、豊富な日本関連の記事を掲載し、交戦国以外の「第三者」の視点を提供したのである。

なお『法文上海日報』の特徴において、報告者が最も注目したのは、その良質で豊富な文化欄である。美しい図版を多く取り入れた日曜特集を中心に、新聞はモダン都市上海や中国社会の文化芸術だけでなく、世界各地の風景民俗、社会歴史、文化芸術、詩歌小説などに関する長編記事を数多く掲載している。しかも同時期の一般新聞にはあまり見られなかった芸術音楽、バレエ、美術、文学評論や翻訳紹介も多く含まれている。その質と量は、優れた文芸誌にも劣らず、視野の開放性は、もはや内向き志向になりがちな多くの外字新聞を遥かに凌駕したのである。

新聞が包容力と開放性を有した理由は、おそらく創始者と編集部にリベラルの思想の持ち主が多く、かつ執筆陣に各国の優れた文化人が加入したことにあったと思われる。アジア文化をこよなく愛しているフランス人たちだけでなく、フランス語に堪能なアジア各国の著名な文化人も多く集まったことは、報告者の調査で明らかになった。例えば後に著名なフランス文学者になった傅雷（1908-1966）は、中国の美術や音楽について報告と評論を発表しており、リヨン大学で文学博士号を獲得した徐仲年（1904-1981）は、「今日の中国文学」という連載記事を通して、魯迅、郭沫若、丁玲などの中国現代文学家の作品を多数翻訳しただけでなく、中国の現代演劇や美術についても熱心に紹介している（図 5）。日本駐リヨン領事の父とフランス人の母を持つ、フランス語の小説を多数創作して好評を得たキク・ヤマタ（Kikou Yamata, 1897-1975）は、戦時下日本の社会、文化、芸術全般についての記事を精力的に書いた（図 6）。そしてフランス人の執筆者には、徐仲年や中国の文化人たちの妻も加わった一方、フランス租界の文化教育界の要人たちも名を連ねた。中国の芸術について情熱溢れる長編記事を数多く発表したフランス人女性の Claude Rivière（生没年不明）は、租界公董局所属のラジオ局の責任者だった。十数年にわたり「上海の音楽」という評論欄を担当した Charles Grosbois（1893-1972）は、長年公董局教育処処長と、アリアンス・フランセイズの上海代表を務めた。しかも戦後彼は京都に移り、関西日仏学館の館長となり、日本文学・文化関係の著作も多く刊行したのである。

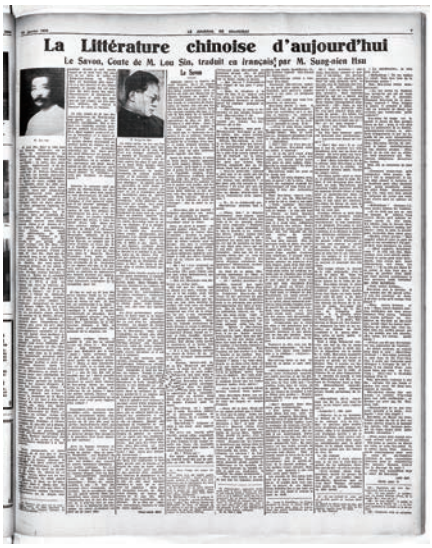

図 5　徐仲年による「今日の中国文学」連載第一篇、魯迅の小説「石鹸」が翻訳紹介されている。写真は魯迅と徐仲年。*Le Journal de Shanghai*、1934 年 1 月 21 日、7 頁。

図 6　日本現代美術を紹介するキク・ヤマタ「東京の芸術生活」。*Le Journal de Shanghai*、1942 年 10 月 4 日、3 頁。

さらに彼ら執筆者の多くは、自国の価値観を一方的に相手に押し付けず、文化の「エクスチェンジ」を大切にする精神を共有している。しかも新聞だけでなく、友人や夫婦関係、または中仏文化聯誼会などの活動を通して日常的な交流が行われていたことも、相互理解を深めた要因になった。多国籍多言語の国際都市だったとはいえ、当時の上海で刊行された外国メディアの多くが自国中心的な様相を呈していた時代のなか、『法文上海日報』の

存在は一層際立つ。

ドイツ版画と上海の魯迅

東家友子（東京大学大学院）

中国近代美術史において、魯迅（1881-1936）は新興木版画運動の提唱者として知られている。魯迅は 1927 年に広州から上海へ移り住み、亡くなるまでの約 10 年間、木刻（創作木版画）の普及に力を注いだ。木刻普及の第一歩として、彼は外国の版画作品の原画や画集を大量に収集し、雑誌や版画集、展覧会を通じて、優れた外国版画作品の紹介活動を展開した。

報告者は現在、魯迅のドイツ版画・芸術書およびその収集、普及活動に関わった人物を手がかりに、1920 年代から 30 年代前半の日本と中国における、ドイツ社会派美術受容の一側面の究明を目的とし、博士論文に取り組んでいる。第 3 回公開研究会では、当時の上海ドイツ人コミュニティーを概観した上で、魯迅の版画収集・紹介活動に携わった人物たちとの関わりについて報告した。

上海のドイツ人コミュニティーについてはすでに多くの研究がされているが、主にヒトラー政権下のユダヤ人難民地区を対象とするもので、1920 年代に関する研究は少ない。それには政治的事情も関係するであろう。第一次世界大戦期に、中国にとって敵国であったドイツの居留民は国外退去を強いられ、人口が激減した。本国ドイツでは、1918 年にドイツ革命が起こり、1919 年にはワイマール憲法が制定され、戦後の混乱やインフレを経験しながらも次第に景気が回復し、1920 年代後半にはつかのまの繁栄期を迎えた。上海でも、教会や学校の移転再開、新しい「ドイツ人の街角（Deutsche Ecke）」の誕生など、1920 年代はドイツ人コミュニティーの復興期であった。

1920 年代は、コミンテルンを中心に、国際共産主義運動が盛り上がりをみせ、知識人や藝術家へも影響を与えた。ワイマール体制下のドイツでは、社会民主主義を支持する知識人や文化人が多く、コルヴィッツやグロッスなどドイツ共産党の文化活動に協力する藝術家もいた。

図 7　ドイツ領事館（手前右手）界隈　後方左手はドイツ教会

図 8　かつてのドイツ郵便局（福州路）

20 年代後半には日本でもプロレタリア美術運動が盛んになり、ドイツ、とりわけベルリンの社会派藝術家が「プロレタリア藝術家」として書籍や雑誌などで紹介された。魯迅はそれらの書籍を上海にある内山書店で購入し、ドイツ「プロレタリア藝術」への理解を深め、中国で新しい木版画藝術を広める上でのモデルに適していると考えたものと思われる。

1929 年から 30 年にかけて、コミンテルンに関わりのある 3 人の女性が、相次いでベルリンからモスクワ経由で上海に到着した。アメリカ人ジャーナリストのアグネス・スメドレーと、ドイツ書店を経営するイレーネ・ヴァイテマイヤー、工務局に赴任した建築士の妻、ハンブルガー夫人である。彼女らはいずれも上海で魯迅と知り合い、特にスメドレーとハンブルガー夫人は、魯迅のドイツ版画の収集や紹介活動を手伝うこともあった。スメドレーが仲介者となり、コルヴィッツから直接作品を購入したことはよく知られている。魯迅にとって、彼女たちとの出会いは、当時のドイツ社会派藝術をより深く、有機的に理解する上で大きな助けとなったといえよう。